

G-SEC Newsletter

No.31 2012.6.1

震災復興から次なるステップへ

— 真価が問われるこれからの日本 —

井田 良 (慶應義塾常任理事 法務研究科教授)
竹中 平蔵 (慶應義塾大学 G-SEC 所長・総合政策学部教授)
武山 政直 (慶應義塾大学 G-SEC 副所長・経済学部教授)
田村 次朗 (慶應義塾大学 G-SEC 副所長・法学部教授)
土屋 大洋 (慶應義塾大学 G-SEC 副所長・政策・メディア研究科教授)



井田 G-SEC は、外部資金による研究プロジェクトの受け皿として誕生しましたが、竹中先生が所長に就任されてからは、研究所としての事業を1つ1つ積み上げて来られました。その中でも、去年は特に大きな転換期だったのではないのでしょうか。

竹中 確かにそのとおりです。2年前を考えますと、医学部におられた竹内勤先生の2つの大きなプロジェクトと、武山先生の4つのプロジェクトが、G-SECの研究費額、研究員数の大きな部分を占めていました。去年は、2009年に規程を改正して取り組み始めた寄附講座が4講座に増え、副所長の先生方の研究プロジェクトも増え、その比率が逆転しました。

大きなプロジェクトがなくなったことは残念なことですが、研究所独自の研究プロジェクトと外部資金による研究プロジェクトに多方面の研究者の叡智が集まり、連携研究や融合研究につなげられる場を提供し、研究成果をシンポジウムや寄附講座により発信していく、非常にバランスの取れた研究所の運営形態が作れたと思っています。

井田 竹中先生は、昨年、「日本大災害の教訓～複合危機とリスク管理」を日、英、中、韓の4か国語で出版し、共編の船橋洋一さんと8カ国11拠点を回られました。大災害で得た教訓を世界に発信することが、日本に援助の手を差し伸べてくれた世界に対する恩返しとの信念に基づく伺っていますが。

竹中 本事業には多くの研究者、企業、現地の大使館や大学等の機関に多大な協力をいただき、皆様にたいへん感謝をしております。

震災直後の4月から12回にわたり15名の方々の協力をいただき「危機対応緊急フォーラム」を開催し、震災で起こった事実、震災対応の成功事例、失敗事例等について多角的視点から整理し、「新しい危機管理」の観点から専門家による分析・議論を加えてまとめたのがこの本です。中国語版の出版には北京大学の林振江先生、林光江先生、韓国語版の出版には高麗大学の金映根先生の協力をいただきました。

1月のダボス会議では、公式出席者全員に配布するUSBメモリに本書(英文)を入れていただきました。

<巻頭特集> 震災復興から次なるステップへ —真価が問われるこれからの日本—

2012年度 G-SEC 新年度会合

G-SEC 寄附講座ガイダンス

復興リーダー会議 第1回、第2回

G-SEC Faculty Seminar 第7回



井田 田村先生が担当された Faculty Seminar でも、震災からの復興をテーマに取り上げて来られましたね。

田村 震災の影響は現地の甚大な被害に止まらず、サプライチェーンの断絶により国内・世界の生産に影響を及ぼしました。Faculty Seminar では、震災からの復興に止まらず日本の復興も視野に入れ、中長期的な視野から、資源循環型社会、経済政策や社会制度、医療問題、メディアの報道、労働問題などをテーマに、6名の研究者をお招きしました。

竹中 昨年まで副所長を務めておられた櫻川昌哉先生（経済学部教授）には、港区共催の公開講座を担当いただき、「自立と絆」をテーマとして、国、自治体、地域コミュニティ、NPO法人の方を招いているいろいろな視点から講演いただき、自分たちでできること、自立社会をいかに創るか、日本人としての進歩等を自ら考えていただく機会を提供しました。

昨年11月に開催された SFC Open Research Forum では、平野達男氏（東日本大震災復興対策担当大臣＝当時）をゲストにお招きして、東日本大震災からの復興、日本の将来、今回の教訓をいかに世界に発信するか等について、また、田村先生のプロジェクトでは、鈴木寛氏（参議院議員（前文部科学副大臣））をお招きして、リーダーシップ、その育成、国際貢献等についてのディスカッションを行いました。

井田 G-SEC は昨年、所長、副所長を中心に、東日本大震災をいろいろな視点・軸からとらえて、非常に精力的な活動が展開されたことを改めて認識しました。海外に発信されたことは、特筆すべきことと思います。

さて、今年度ですが、「グローバル人材育成事業を新たな事業の柱として立ち上げる。」としましたが。

竹中 グローバル化の推進は必須のことですが、特に、日本のグローバル化において、一番必要ながら、一番遅れていると言えるのが「グローバル人材育成拠点」です。これをぜひ実現したいと考えています。

基本方針

1. 研究・教育については、これまでの成果を踏襲して、さらなる発展をめざす。
2. グローバル人材育成を、新たな事業の柱として立ち上げる。
3. 成果を社会へ発信・還元するために、出版および Web 広報、セミナーを強化する。

(G-SEC 事業計画より)



田村 私が研究代表者を務める「復興とリーダーシップに関する研究」のサブプロジェクトとして、経済学部の細田衛士先生に委員長をお願いして「復興リーダー会議」を立ち上げました。東日本大震災の被災地での支援活動で実績を積んだリーダーや、今後の復興を担う人々による「熟慮」と「議論」を重ねながら課題解決に取り組み、復興に携わるリーダーを支援することにより、被災地の、さらには日本の復興につなげていこうという取り組みです。従来の日本型のリーダー像にとらわれない、日本発グローバルリーダー像とその育成プログラム作りにつなげて行きたいと考えています。

井田 土屋先生は「アメリカ研究プロジェクト」の核となって活動をされています。

土屋 アメリカ研究プロジェクトは2年目に入ります。福澤先生以来、慶應義塾にはたくさんのアメリカ研究者がいますが、アメリカ研究のための拠点はありませんでした。少しずつですが、そうした人材が集まる場所にしたいと思っています。ただ、もはやアメリカばかりを研究していれば良いという時代ではなく、アメリカを通じて世界を見る、あるいは世界がアメリカをどう見ているかを探るといった視点を持っていきたいと思っています。そして、日米関係に閉じた研究ではなく、広くグローバル社会の中で日本とアメリカの位置づけを考えていくプロジェクトにしたいと思っています。

井田 武山先生は4月から副所長に加わっていただきましたが、昨年までも ICT (Information and Communication Technology) を使ったマーケティングについて、G-SEC を拠点に活動をされましたね。

武山 消費者を巻き込んだ企業のオープンイノベーションやマーケティングの方法を開発すべく、産学共同でプ

プロジェクトに取り組んでいます。経済のグローバル化や情報環境の急速な変化のなかで、企業にとって、新たな事業を創造し、また顧客と価値を共創していくことが使命となっています。私のプロジェクトでは、特に、様々なコミュニケーションメディアを活用し、組織の壁を超えた知識やアイデアの創発を起こすことに焦点を当てています。また、ヨーロッパを中心に発展しつつあるサービスデザインの方法論も昨年から取り入れ始め、さらに本年度は美術鑑賞やロボット事業を研究対象にする等、

研究分野の壁も横断した活動に挑戦していきます。

竹中 商学部の梅津光弘先生の「慶應-国連 PRME プロジェクト」では、12月に、UNGC-PRME アジア地域大会の開催を計画しています。アジアの各地域の代表が集まり、有意義な大会になるものと期待しています。

井田 G-SECは今年度も、所長、副所長を中心に、グローバルな視点から幅広い研究活動を計画されており、その成果に非常に期待しています。

竹中 ご期待にこたえられるよう、取り組みたいと思います。

2012 年度 G-SEC 新年度会合 (2012 年4月5日(木) 東館4階セミナー室)

G-SECは、外部資金によるプロジェクトが一つの傘の下で研究活動を行っている。本会合は、研究者の顔合わせと、異分野の研究者が集まることにより、部門横断的研究や融合的研究に発展することをねらいとして年度

初めに開催している。冒頭、竹中所長より今年度のG-SEC事業計画について説明があり、引き続き、研究グループごとに研究の紹介と自己紹介が行われた。

今年度の研究課題は以下のとおり。 (4月5日時点、●プロジェクト、-サブプロジェクト)

- グローバル経済研究会 (竹中)
- 国際金融市場共同研究会 (竹中)
- アメリカ研究プロジェクト (竹中)
 - 国境を越える統治機構と技術—東アジアおよび太平洋島嶼国への米国の影響力— (土屋)
- 復興とリーダーシップに関する研究 (田村)
 - 交渉学研究 (田村)
 - 復興リーダー会議 (田村)
- ソーシャルメディアを活用した実空間におけるコミュニケーション設計及びデザイン手法の研究開発 (武山)
- 地域コミュニティサポートスタッフ養成に関する調査研究及び運営業務委託 (武山)
- グローバルバブルの研究 (櫻川)
- 慶應-国連 PRME プロジェクト (梅津)

G-SEC 寄附講座ガイダンス (2012 年4月5日(木) 西校舎 501 番教室)

グローバルセキュリティ研究所では、社会の叡智や今日的課題についてリアルタイムな情報を学生に伝え、自ら考え、社会の発展を担う人材育成につなげることを目的として寄附講座を設置している。

今年度は継続4件、新規2件の講座を開設する。履修申告に先立ち、各講座の趣旨やねらいを紹介するガイダンスを行った。昼休み時間帯にもかかわらず250人を超える学生が参加し、講座への高い関心がうかがえた。

今年度の設置講座は以下のとおり。

- 【継続】
 - ・シティグループ証券寄附講座「グローバル金融市場論・同演習」(春学期・秋学期)
 - ・森ビル寄附講座「アートと社会」(秋学期)
 - ・フェイス寄附講座「イノベーション&リーダーシップ」(秋学期)
- 【新規】
 - ・アントレプレナー寄附講座「起業と経営」(春学期)
 - ・中外製薬寄附講座「健康への貢献：CSR論からの新たなアプローチ」(春学期)

復興リーダー会議 (委員長:細田衛士(経済学部教授) 副委員長:田村次朗(G-SEC 副所長、法学部教授))

本会議は、東日本大震災の被災地での支援活動で実績を積んだリーダーや、今後の復興を担う人々により、被災地の復旧から復興に向けて情報交換、対話と議論、研究を行い、復興に携わるリーダーを支援することにより、被災地の、さらには日本の復興につなげていくことを狙いとしている。



第1回 (2012年4月21日(土) 東館 G-SEC Lab.)

冒頭、細田衛士委員長(経済学部教授)より、開催趣旨ならびに、本会議の目指すところについて説明があり、引き続き以下の講演と委員32名による対話と議論が行われた。

- 第1部「復興リーダーと問題解決力 - 交渉学への招待 -」 講師:田村次朗(G-SEC 副所長、法学部教授)
第2部「復興をリードする指揮者の仕事 - 「二つ」を同時にコンダクトする -」 講師:伊東 乾(作曲=指揮)

第2回 (2012年5月26日(土) 東館 G-SEC Lab.)

5月26日(土)に、委員27名の出席により第2回会合が開催された。

今回は、グローバル人材育成を視野に、国際的な市民活動について学び、議論することを狙いとして、政策提言や普及啓発活動(アドボカシー活動)に取り組む国際

市民グループ RESULTS の Joanne Carter 氏をお招きした。民意の反映された国際援助を実現し、飢餓と貧困の根絶を最優先とする“政治的意思”の確立に向けた活動を紹介いただき、復興リーダーと、対話と議論が展開された。

「Creating Global Change Through Local Advocacy: How Individuals Can Shape Political Priorities and Improve the World's Health」(現地から発信されるアドボカシーを通して、世界の新しい流れを創り出す:如何にして個人の力で政策における優先課題を形成し世界の健康を向上することができるか)

G-SEC Faculty Seminar 第7回 (2012年4月25日(水) 東館6階 G-SEC Lab.)

世界経済フォーラム(WEF)から Thierry Geiger 氏をお招きして、「日本の国際競争力~世界経済フォーラム国際競争力レポートからの示唆~」をテーマに全て英語で行われた。

WEFは独自の視点から競争力の調査を行っており、示唆に富む結果を提示している。例えば、日本は成熟国家であって国際競争力が下位にあると思われがちだが、調査結果では世界第9位に位置付けられている。なぜなら WEF が日本の成熟度を「安定性・信頼性がある」と評価しているからである。近年の新興国にみられる高成長のみを競争力の指標としない。このような WEF の視点は新たな気づきを与えてくれる大変有意義なものであった。

